

## 地域情報（県別）

### 【栃木】開業のきっかけは米同時多発テロとの遭遇。「もうあかん」と人生観激変-高橋昭彦・ひばりクリニック院長に聞く◆Vol.2

2019年10月21日 (月)配信 m3.com地域版

全国でもまだ取り組む医師の少ない小児在宅医療を推進するだけでなく、重度の障害児への一時支援事業や病児保育事業も展開する「ひばりクリニック」（栃木県宇都宮市）院長の高橋昭彦氏。開業を決意したのは、2001年のアメリカ同時多発テロに遭遇し、人生観が変わったことがきっかけだった。在宅医療の魅力を知った若手医師の人生がさらに激変した瞬間を振り返る。（2019年7月4日にインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)

——先生は大学卒業後に10年間、地元の滋賀県で地域医療に携わりました。その後の1995年から開業する2002年まではどんな風にキャリアを重ねていったのですか？

栃木県の沼尾病院で6年間、在宅医療に取り組み、滋賀県の老人保健施設で施設長を1年ほど務めた後に開業、という流れです。

滋賀県から栃木県に仕事の間を移したのは、自治医科大学の先輩で現在は公益社団法人「地域医療振興協会」の理事長を務めている吉新（よしあら）通康先生に誘われたためです。吉新先生とは私が大学時代に知り合ってから以来、仲良くさせてもらっている仲。先生から「宇都宮で医師が足りない病院があるから、そこで在宅をやってみないか」と誘われたんですね。



高橋昭彦氏

——自治医科大学も栃木県にあるので、馴染みの土地に再び戻られたと。

いえ、自治医科大学があるのは同じ栃木県でも宇都宮市から20kmほど離れた下野市で、宇都宮市は私にとって縁のない地域でした。まるで落下傘でぼとりと降り立った感じでした。

在宅医療を行うに当たっては多職種と知り合い、関係を深めていくことが欠かせません。そこで私は、「沼尾病院在宅医療部長」と名刺に刷って関係者に配って回りました。在宅医療部というのは私が命名した組織。もちろん、メンバーは当初私一人しかいませんでした。

介護系やソーシャルワーク系などさまざまな集會に出しては必ず質問するようにしました。「はい、沼尾病院在宅医療部の高橋です！」と威勢よく手を上げる私を見て、参加者は「なんか変な奴がおるなあ」「あの人また来るわ」などと思っていたかもしれませんね。

でもそんなことを続けていると、地域で頑張っているホームヘルパーさんやソーシャルワーカーさんと仲良くなっていくんですよ。これは大事なことです。地域には必ずキーパーソンがいます。そんな人を押さえておくのが在宅医療を推進するためのポイントです。

これも面白かったですね。患者さんやご家族だけではなく、地域に入り込んでいけることも在宅医療の大きな魅力でしょう。

——バイタリティーに富んでいて、分け隔てなく人と接するような印象を受けます。先生のその姿勢やマインドはどうやって培われたのか気になりました。

人間に興味があって、人が好きだからじゃないでしょうか。これが自分の原点なんだろうなと思う場面もあります。私の両親は共働きでしたから、小さいころ私はよく、父の姉の伯母に預けられてたんですね。その伯母がとてもいい人で、私は大好きでした。小学校に上がって一人で過ごせるようになった後も夏休みや冬休みにはわくわくしながら伯母の家に泊まりに行っていました。

私が3歳くらいのころです。伯母に手を引かれて一緒に散歩をしていると、向こうから男の人が歩いてきて、すれ違いざまに伯母が「こんにちわあ」と声をかけました。挨拶を返した男の人と別れてから「おばちゃん、あの人知ってるん？」と私が聞くと、伯母は「知らんよ。知らん人やけどな、こうやって挨拶をするんよ」と笑いながら私に語りかけました。

幼いながらこの場面がすごく印象に残っていて、私が人と接する上での礎になったように思います。私は外来診療時、患者さんが入室されたときは立って挨拶をして、患者さんが部屋を出られる際にも立って「お大事になさってくださいね」と声をかけるようにしているのですが、こういった振る舞いも伯母との触れ合いに影響を受けているのかもしれない。



同院の隣にある重度障害児の暮らしを支援する認定特定非営利活動法人「うりずん」

——沼尾病院勤務と滋賀県の老人保健施設を経て開業したとのことですが、開業を決意した理由は？

「自分の本当にやりたいことをやろうと思ったなら、自分が責任を取れる立場になる必要がある」と考えたからです。私は勤務医時代、在宅医療に魅力を感じて力を注いできたわけですが、病院ではどうしてもご高齢の方が優先されがちで、在宅医療の必要な子どもがいても対応することができませんでした。私は小児科も専門にしていますから、こうした状況にやりきれなさを感じていました。

悶々とした思いが吹っ切れて、開業しようと決意したのは2001年9月、ホスピスに関する研修を受けるためにアメリカに滞在していたときです。研修の一環で私たち日本人の参加者はマザー・テレサが作ったワシントンのホスピスを訪れました。そして、そこにいるシスターと会話を交わす機会がありました。

「日本から来た医師なんだけど、やりたいことができていないんだ」。私がそう相談すると、シスターはにっこり笑ってこう答えました。「目の前のことをやりなさい。そうすれば、自ずと必要なものは現れます」。なぜかはわかりませんが、すんと胸に落ちるものがありました。そのホスピスはボランティアと寄付だけで成り立っていて、例えば施設の窓が壊れると、どこからともなく修理を買って出る人が現れ、トラブルもたちどころに解消されてしまうそうです。そんな話を聞いていたからかもしれませんが、私はなんだか霧が晴れるような思いがしました。

帰国後すぐに行動に移そうと思ったのは、滞在中にアメリカ同時多発テロに直面したからです。9月11日のその日の朝、私たちはニューヨーク・マンハッタン島のちょうど真ん中に位置する宿泊先のホテルから研修先の病院に向かうバスで南下していました。ところが、車窓から見える風景がおかしい。パトカーや消防車がサイレンを鳴らしながら私たちをぐんぐん追い抜いていきます。やがて、前方から赤々としたビルが現れました。私たちが降り立った病院の前とワールドトレードセンターは目と鼻の先。四方八方から悲鳴が聞こえる中で、ビルが崩れ、煙やほこりが辺りにもうもうと立ち上る様を見ました。

当然、研修は中止。その日から飛行機は飛ばなくなり、私たちはホテルに缶詰めになりました。その2日後、ホテルの28階で研修参加者とミーティングをしていた時です。いきなり、館内放送が響き渡りました。「お客様、避難してください」。そう繰り返されたのです。

ホテルで何かが起こったのかもしれない。そう思い、私たちは使用を禁止されたエレベーターを尻目に、非常階段で下りていきました。中には足の遅いお年寄りもいて、焦った研修参加者の中には「もうちょっと速く歩けないかしら」とこぼす人もいましたが、「ここに飛行機が突っ込んだりしたらみんな同じ。みんなで一緒に下りよう」と私は声をかけました。

無事に外に出ることができ、ホテルの中でも何も起きなかったようですが、このときは「もうあかん」と思いました。自分が死ぬかもしれないと思ったのは人生で初めてで、「いつ死ぬかわからないのであれば、すぐに自分のやりたいことをやろう」と開業を決意したのです。

#### ◆高橋 昭彦（たかはし・あきひこ）氏

1961年滋賀県長浜市生まれ。1985年に自治医科大学を卒業後、地元で10年間にわたって地域医療に携わり、この間に在宅医療の魅力を知る。栃木県宇都宮市の沼尾病院で在宅医療部長を6年務めるなどした後、2002年に在宅医療に注力するひばりクリニック（宇都宮市）を開院。子どもへの対応にも力を入れており、小児在宅医療を行うだけでなく、医療的ケア児などの重症児を預かる認定特定非営利活動法人「うりずん」の運営や病児保育事業も展開。2016年には日本医師会が主催する「第4回赤ひげ大賞」を受賞した。日本小児科学会小児科専門医。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

